

韓国行(3)

五月十七日の午後、ソウル鍾路五街のキリスト教会館前からバスにのり、日韓JIM協議会の会場である水原アカデミーハウスに向つた。アカデミーハウスは木原郊外の貯水池に面した斜面にあつた。「개연을 위한집」(明日のための家)と云う名がつけられていた。協議会は十七日から十九日まで三日間行なわれたが、参加したのは日本側から九人、二十六人のアメリカ人宣教師を含む、韓国側から約二十人であつた。(朴炳圭牧師の開会礼拝を始め)、公害問題、現代キリスト教宣教の問題等について報告・討論された。日本側の報告者のうち何人かがビザの発給を拒否され今回の協議会に参加できなくなつたため不参加なものではあつたが、私にとつては様々のことを教えてくれた協議会であつた。協議会での各々の報告はここでは触れるスペースがないので、いま作成中のヨヤ一回目韓JIM協議会報告集を覗いていただきたいと思う。

韓国側の参加者はソウルの人が多くつたが、いずれ

も都市産業宣教(JIM)の仕事にあたりつてゐる実務者だつた。済州島、釜山、清州、に川、龜尾、堤川、ソウル等のスライド、工場地帯で、あるいは農村で、伝統の人々とともに活動している人々だつた。そのうちの何人かは、JIMの事務所に入りするようになつたために会社を解雇され、その後訓練をうけて専従者になつたといふ人もいた。

協議会の最初にすべての参加者が自己紹介することになつたが、日本人の方は英語で話すが、日本語で話して韓国語に通訳してもらつが、どうやらがだつた。長年勉強した英語もままならず、八年前勉強した朝鮮語もよくできなが、「ここをしゃべらねば」と思い、朝鮮語で自己紹介し、なにやかやとしゃべつた。すると最初の会議が終つたあと何人が朝鮮語で話しかけってきた。自分の伝えたいことは見ぶり手ぶりなどとか話をすが、相手が自分のペースで話をとほんどわからぬ。でもなんとかかんとか聞いてしゃべり、協議会の三日間でかなり勉強ができた。これも、自分より朝鮮語のわかつてゐる日本人が横におれば恥じるものあるだろうが、自分以外に誰もわからないと思うと平気で何度も聞きなおすし、言いたいほうだけであつた。

私に話かけてくれたのは解雇され専従者になつた

ような、英語があまりわからぬ日本の方の活動家で、時々、コングリッシュ（コリヤン・イン・グリッシュ）のこととをこういうやうだとシャン・グリッシュ（シャンペー）ズイングリッシュ）とませながら話した。その一人が清州JIMの鄭擴東牧師で、彼から清州JIMでの労働者・農民のハーストの話を聞いた。彼も協議会に参加するまで三月十五日から二ヶ月もハーストに参加しており、ほんとうにやせこけた貌をしていた。彼はノウル中央のJIMには批判もあり、労議会でも「日本から関係者が来たのに、なぜ現場研修にはノウル近辺のJIMだけ案内するのか」と不満を述べていた。

彼からザラ紙の25ページのビラ等としたものももらった。彼はこのビラをもつてかれと言つた。ビラ等は空港でとりあげられる可能性もあるので、危険ではないかと言つと、「韓国ではもうこれ以上あげない」とりあげられてもすぐに当局にもわかつていいことはないでくれまわぬ。れんがそれそれを持つてかえれば一人分ぐらに無事につくだろう」という。あつくりかんとしたものである。(毎世界10月号のTK大生「韓国からの手紙」に彼の息子の死のことがかかれている。)

X X X

木原アカ、ミニーハウスの入口には協議会のありだ中当局の黒い車が止つており、「監視」してたが、中

に入つてキレーナ園するといつよなことばなかつた。木原のアカデミーハウスは良くいえは、解放区、悪くいえは、隔離された場所で、どう中でやることにつけては当局も黙認するといふことらしい。

アカデミーの廊下は、民主回復や労働軍の人権を叫ぶデモや集会の大きな写真が掲げられていてし、会議の雰囲気も集まつて会議を再開する度に、あるいは会議が長びいてつかれた時に「We Shall Over Come」(勝利を我らにして)を大きな声で歌うという興奮だ。夜のアルコールが入つての交流会のことは、おそらく一生忘れないと思つ。芸達者が多く、次から次へと歌や舞りがとび出した。そこでは放送禁止歌も何もなく、「金剛のイエス」も「おお自由」も歌つていて。

その中で「春歌」ともじつた昔歌のおもろいのがあった。日本でも「宮本武蔵の詠」などとして、長いはさわっこいがキスじこはいけない→キスは→が乳房はいけない→…と徐々にエスカレートしていくのがあるが、それと同じよう韓国のおもろいのが思つて聞いていたら次は春歌だった。それはスローが徐々にエスカレートし、「緋新竜法徹棄はい」けど政權打倒はいけないことはつづくのである。彼らにいたがつをかいも見たような気がした。一ノヅベー(井田)